



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.112  
2013.1.1  
謹賀新年

\*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 阿玉台式土器 — 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 — 塚本師也

### 第5回 阿玉台式土器の研究史(3)

西村正衛による「発生的様相、古式的様相、発展的形態、末期的様相、終末期の状態」の5細分(西村1960)とIa~IV式の細分発表(西村1969)の間に、他の研究者も阿玉台式土器の細分を発表する。縄文中期研究グループ(後の下総考古学研究会)の高橋良治は、利根川下流域と異なり、勝坂式土器の強い東進を受ける下総台地西南縁の阿玉台式土器を、伴出する土器を根拠に、単独で出土するA式、勝坂式土器と共伴するB式、加曽利E式土器と共伴するC式に細分した(高橋1962)。A式は阿玉台Ib式、B式は阿玉台II式後半からIII式前半、C式は阿玉台III式を中心とする。中村紀男は、栃木県大田原市地蔵山遺跡の阿玉台式土器を紹介し、この地方の阿玉台式土器を細分した(中村ほか1965)。イ)純粋な阿玉台式の特徴を持つ時期、ロ)縄文施文、断面カマボコ状の隆帯、結節沈線文や爪形文に特異な変化がみられる時期、ハ)隆起線文の発達と縄文のさらなる顕著化した時期、という三細分である。イ)が阿玉台Ib~II式、ロ)が阿玉台III式、ハ)が阿玉台IV式を中心とする。寺門義範は、陸平貝塚出土の阿玉台式土器を細分し、霞ヶ浦周辺地域は、西村、高橋による下総台地の細分とは異なることを指摘した

(寺門1967)。取り上げた土器は大半が阿玉台II式で、これを三細分した形となる。段階別の分布差や霞ヶ浦北岸と南岸での伴出土器の違いに言及するなど、現在まで等閑視されてきた視点がみられる。それぞれ、利根川下流域の土器との地域差を主張して、独自の細分を行ったが、地域的差異の具体的特徴は示されなかった。なお、高橋、中村等の論考は、阿玉台式土器が、海岸部を中心とした漁撈文化の所産と考えられてきたことに対し、内陸部に分布することを明らかにして、問題視する試みである。

1974(昭和49)年、佐藤達夫は「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」を記す(佐藤1974)。異系統土器の同一遺跡共存、異系統文様の同一個体共存の事例を分析し、土器型式成立の要因、即ち背後にある土器製集団の問題に取り組んだ縄文土器研究史上画期的な論文である。当時確定していなかった西関東地方の土器の年代的位置けに、西村による阿玉台式土器の細分を援用し、阿玉台Ib式については更に2細分した。この論考により、西村編年の有効性が示される。なお、阿玉台Ia式期より前は、「阿玉台直前型式」(西村1972)ではなく、雷貝塚報文(西村1955)の「雷第七類」

を用いている。和田哲は、東京都西上遺跡の報文で、勝坂式土器と阿玉台式土器の編年対比を行った(和田1975)。戸田哲也は、西村の阿玉台式土器の編年を再検討し、武蔵野台地での共伴事例を示して、阿玉台式土器と勝坂式土器の併行関係を整理した(戸田1978)。

谷井彪は、勝坂式土器の文様構造を追求し、比較対象として同時期の阿玉台式土器の文様構造にも言及した。当時関東地方の勝坂式土器研究が三細分に拘ったのに対し、井戸尻編年の基軸として勝坂式土器の編年を整備し、阿玉台式土器との並行関係も明らかにした(谷井1977a-b)。中部地方から出土した阿玉台式的な土器を取り上げ、これを解説する過程で、懸垂文、波状口縁、連続指圧文などが阿玉台式土器の特徴であることを指摘した。さらに勝坂式土器の成立に、阿玉台式土器が基礎にあるとした。また、勝坂式土器と阿玉台式土器は、相互に影響を与えながら、各基本的な文様構造を貫いていることを明らかにした(谷井1977c)。大波状縁が発達する阿玉台式土器に対し、勝坂式土器は平縁を基本とし、把手類が発達するといった違いに触れた。

#### 【参考文献】

- 佐藤達夫、1974、「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館  
高橋良治、1962、「阿玉台式土器の研究史と問題の提起」『考古学手帖』16  
谷井彪、1977a、「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察(前)」『信濃』第29巻第4号、信濃史学会  
谷井彪、1977b、「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察(後)」『信濃』第29巻第6号、信濃史学会  
谷井彪、1977c、「勝坂式土器の文様構造について」『埼玉考古』16、埼玉考古学会  
寺門義範、1967、「陸平遺跡における阿玉台式土器の在り方」『常総台地』2、常総台地研究会  
戸田哲也、1978、「阿玉台式土器と勝坂式土器との関係」『千葉県印旛郡富里村 新橋遺跡発掘調査報告』千葉県印旛郡富里村教育委員会  
中村紀男・青木義脩・齋藤兵衛・鈴木斌、1965、「関東北部における阿玉台式土器の様相—大田原市地蔵山遺跡を中心として—」『栃木県考古学研究会』No.9-10、栃木県考古学研究会  
西村正衛、1955、「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚(第二・三次調査)」『早稲田大学教育学部学術研究』第3号  
西村正衛、1960、「利根川下流域における縄文中期文化の地域的研究(予報)」『古代』第34号、早稲田大学考古学会  
西村正衛、1969、「千葉県小見川町木之内明神貝塚—東部関東における縄文中・後期文化の研究—其の一」『早稲田大学教育学部学術研究』第18号  
西村正衛、1972、「阿玉台式土器編年の研究の概要—利根川下流域を中心として—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科

※巻頭連載は隔月です。今回は再び神村先生です。

#### 目次

- |          |                   |         |          |                       |         |
|----------|-------------------|---------|----------|-----------------------|---------|
| ■阿玉台式土器  | 阿玉台式土器の研究史(3)     | 塚本師也 …1 | ■リレーエッセイ | マイ・フェイバレット・サイト(第105回) | 岡林峰夫…3  |
| ■考古学の履歴書 | 良き師・良き友に恵まれて(第7回) | 渡辺 誠 …2 | ■考古学者の書棚 | 「土器づくりからみた3つのアジア」     | 加藤雅佳子…4 |

## 考 古学の履歴書

## 良き師・良き友に恵まれて(第7回)

渡辺 誠

## 8. 清水潤三先生の思い出

清水先生と江坂先生はあまりいい仲でないように言われているが、身近で教育を受けてきた私にはそんなことはないというのが実感である。そして何よりもありがたかったことは、横浜ヤクルト社長野村泰三氏のアルバイトを世話して下さったことである。

野村氏と慶応の研究室とは関係が深い。同氏が横浜有隣堂の会長もされていて、『加茂遺跡』・『亀岡遺跡』・『加瀬白山古墳』などの報告書や、ベトナム王朝の正史である膨大な『大南実録』の出版に、多大な協力をして頂いた。その方のお手伝いが必要なのだが、横浜と慶応の中間に下宿していて、かつ金の無いやつ、そうだ渡辺お前が行けということになった。その仕事は、最後に同氏著『日本乳製品小史』として有隣堂から出版されたが、実に楽しい仕事であった。この仕事は大きく二つに分かれている。前者は乳製品に関する文献による調査であり、後者はヤクルト業界に関連してくる聞き取り調査である。

はじめて会社に伺ったのは1963年であるが、すぐ一ヶ月分の給料を頂いた。自分の頼みで自腹を切らせることはしないとわれ、かつ古本屋で図書を購入したら直ぐに経理部長に領収書を渡し、支払いを受けるようにとのことであった。後日京都に勤め、残っている仕事と、大学院の授業を受けるために上京した時にも、建て替えなどはまったく無かったのは大変ありがたいことであった。

そしてその前払い的な給料のお陰で、会社の仕事がやり易かったばかりではなく、調査を兼ねて遺跡の見学をすることもできた。江戸時代に幕府の直営牧場であった安房の嶺岡牧場の調査にかこつけて、念願の館山市鉈切洞窟を見学できた。縄文後期初頭の多量の骨角器が出土し、東北の文化的影響をよく示している重要な遺跡である。

この時かつての嶺岡牧場の古文書を調査し、8代将軍吉宗の時にオランダから洋牛が伝えられたというのは大きな誤解であることが判明した。このことについて少し回り道してみると次のようなことである。長崎出島のオランダ商館長が江戸へ参府し、オランダ料理でパーティーが行われたとき、バターをうまいと思った吉宗公その製法を下問したのに対し、白牛の乳を搾って作ると言われた。そして、あまねく天下に白牛を求めわずかに3頭を得ると『徳川実記』に記されている。白いのはホルスタインを意味しているのに対し、和牛の中の突然変異である白い牛を献上させ、嶺岡牧場で育成し、白牛酪(バター)を作らせた。これらの調査には『オランダ商館の日記』も読んだが、不明な点はその翻訳を行った法政大学の村上直教授のお教えを頂いた。お陰で近世の食文化についても理解を深めることができ、後に近世の焼塩壺の研究にも大変役に立ったのである。

しかしこうしたことばかりではなく、野村泰三社長から直接

教育されたことがある。土器などのことが詳しくなっても、その解説屋にとどまっては駄目だ、歴史にどうつながっていくのかが大事なことでと強く言われた。この言葉は私の座右銘になっている。またドイツやアメリカの証拠主義的な学問はつまらない。きみの指導教授の松本信廣先生のように、フランス風の学問を身につけるようにとも言われた。

実際野村社長は、波乱万丈の政治的な世界で青春を過ごしたらしい。この点は清水先生からも、社長から聞いたことはやたらに口外しないようにと言われていた。そして戦後大陸から帰国して、白水社という出版社を起し、ここから古野清人氏の名著『原子文化の探求』が世に送り出されたのであり、ヤクルト業界に入ったのはその後のことらしい。東京オリンピックの時に、その入場券を届けるため古野先生宅に伺うお供をさせられ、感激したものである。

清水先生はこうしたことの他に、楽しい思い出がある。大学院修士課程の時講義を受けていたのは少なかったが、休むものがいて3人で受けることがあった。そしてたまたま大相撲が開かれている時は、かつて正門であった東側の「まぼろしの門」の下の菓子店兼喫茶店の福茶屋の奥で、相撲の取り組みの合間に講義を伺った。当時の立ち会いは今と違って長かったからできたものでもあるが、先代若ノ花や栃錦の全盛期であった。ある時大学でお会いした時に、君らの時は面白かった、今そんなことをしたら、学生に何言われるかわからないよ、と笑っておられたのが懐かしい。

またある遺跡の重文指定のための一括資料のカードを紛失した役所のために、急いで慶応の分で復元する必要が生じ、夏休みに二日間先生宅へ伺ったことがあった。書斎の立派なデスクに座り、とにかく完成することができた。

また年2度盆暮に、大学の用務員室に1升瓶2本をぶら下げてお礼を伺う時のお供もした。まだ西校舎が半分しか出来ておらず、エレベーターもなかった時に、階段教室の屋根裏に当たる資料室まで発掘品を担ぎあげて下さる方々に、頭を下げに行かなくてはならないと言われた。そうしたしつけも仕込まれた。別刷りのサインは、必ず頭に謹呈と書け、間違っても恵存なんて書かないように、それは年下にあげる時に書く言葉だと言われた。そして封書に御中と書く場合、必ず宛名の真下に書かなければならないとも教えられた。こうした礼儀は、先に記した平井尚志氏とも同じであり、近年の若い人にみられる非常識には目を覆いたくなってくる。

略歴	
昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立警城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 105

## 赤坂今井墳墓 ～ 京都府京丹後市

岡林 峰夫

赤坂今井墳墓は、京都府北部の日本海に面した丹後半島のほぼ中央部、京丹後市峰山町赤坂小字ケビ等に所在する。方形の墳丘に裾部にテラスが取り付く構造で、墳丘規模は39×36mを測り、テラス部を含めた墓域は径50mにも及び。弥生時代終末期の日本有数の大型墳墓といえるだろう。

立地は、日本海へ抜ける狭長な谷筋に面した痩せ尾根の丘陵先端部に位置しており、墳頂に立ってみても平野部をうかがうことはできず、視界はそれほど開けない。しかし、この谷筋は日本海へ続いており、沿岸部には潟湖の一つがかつて存在したと考えられている。広域的な視点に立つと、海を意識した交通の要衝に立地していると位置づけられる。

実は、この墳墓は昔から知られていたものではなかった。昭和61年実施の分布調査では、この墳墓は中世山城として認識されていたのである。これは墳丘部を単郭式の曲輪とみなし、裾に取り付く平坦面を帯曲輪と認識したためであるが、この土地に関する言い伝えは近代に移転した神社に関するものしかなく、加えて丹後地域ではこのような大型墳墓が存在するという認識がそれまで無かったためでもある。

道路施設の建設に伴い、曲輪部分の半分が造成範囲に予定されたため、平成11年、京都府埋蔵文化財調査研究センターが事前調査を行ったところ、中心的埋葬施設である第1埋葬は長さ14mに及び巨大墓壙であること、複数の周辺埋葬施設が存在し、主郭部分がそのまま墳丘とみなされることが確認され、この遺跡が弥生時代終末期の大型墳墓であることが確定的となったのである。この時点で保存協議が行われ、道路用壁の工法変更による保存が決定した。同時に自治体による用地取得も行われ、遺跡が全面的に保存されることになった。関係者の努力と計らいにより速やかに保存が決定したことは特筆に値する。

平成12年、峰山町教育委員会と京都府埋蔵文化財調査研究センターは内容確認のための3次調査を実施した。筆者も担当の一人として調査に携わることになった。第1埋葬の調査では、墓壙中央で表土直下から落ち込みが確認され、こぶし大の円礫および土器片が多量に出土した。調査を進めるにつれて、円礫の出土状況から、木棺の腐朽に伴い、上にあった円礫がすり落ちてできた落ち込みであることがわかったが、この地方の円礫を用いた祭祀の存在を確認できた事例となった。同時に、この地域の弥生後期墳墓には通有であるが、破碎土器供献による墓上祭祀の痕跡を確認した。加えて、墓壙埋土に掘り込まれた一列の木柱列を確認し、これも墓壙上の祭祀儀礼に使用されたものと考えている。

この円礫と破碎供献土器を用いた祭祀は第4埋葬でも確認された。使用された土器には北陸・播磨・関東系のものがあり、当時の丹後地域の土器交流の一端を示している。



▲赤坂今井墳墓遠景



▲第1埋葬墓壙上円礫群検出作業風景

副次的埋葬施設である第4埋葬の調査では、船底状木棺から玉類で構成された頭飾り一式、鉄剣、ヤリガンナが出土した。さらに頭飾りに使用されたガラス管玉から古代中国の顔料「漢青」の主成分であるケイ酸銅バリウムが検出され、大陸との交流を示すものとして注目を集めた。

以上、平成12年のこの墳墓の調査は、丹後地方の弥生社会の到達点を示す墳墓の調査として大きな成果を挙げた。蛇足になるが、第1埋葬の棺内調査は実施していない。これは調査委員会での検討の結果、保存協議の理念を尊重し、これまで積み上げた成果で遺跡の性格はつかめるとの判断から墓壙上の調査に留めているものである。

赤坂今井墳墓は平成19年7月26日、国史跡の指定を受けた。現在、仮整備を実施し現地見学は可能であるが、本格整備が待たれる。手付かずの自然が多く残る丹後地方の中で、その規模、内容、さらに発見経緯も含めて象徴的な遺跡と言えるのではないだろうか。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは加藤晴彦さんです。

## 考古学者の書棚

## 「土器づくりからみた3つのアジア —エジプト・台湾・バングラデシュ—」

齋藤正憲／創成社(2012)

加藤 稚佳子

私が考古学に興味を持ち出したのは小学生の頃からでした。テレビ番組で見たエジプトに憧れを抱き、大学生になったら必ずエジプト考古学を勉強しよう、そう思っていました。しかし、入学した大学ではエジプト考古学を学ぶことは出来ず、また考古学を専攻しなかったために、エジプトと考古学は私にとって遠い世界の話となっていました。そのような中、大学院修士課程に在籍中の2005年にエジプト発掘調査隊に入れて頂けるチャンスを頂き、以降2009年、2010年と過去3回エジプトで発掘調査に関わらせて頂きました。憧れであったエジプトでの発掘調査に携わる機会を頂いたことによって、本格的にエジプトの考古学、宗教、文化について学び始めるようになりました。

修士卒業後は、都内の某博物館にて教育普及に関する職員として働いていました。考古学や美術史、絵画、彫刻など様々な文化財を目にすることが出来る博物館で、専門知識の無い一般来館者に対しどのような働きかけを行うことで文化財の持つ魅力を伝えることが出来るのか、その難しさに葛藤する日々を過ごしました。博物館での就業経験は、専門家の役目は最先端の調査を行うことだけではなく、広く社会一般の人たちへどのように分かりやすくその魅力を伝え文化財に対する理解を深めていくか、を常に考える必要がある、そう思うきっかけとなりました。

今回紹介する本書は、私が感じたエジプトの面白さや考古学的な視点を、一般の人たちにも分かりやすく、そして面白く伝えることに成功している本だと思えます。土器を媒介として、エジプト・台湾・バングラデシュ 3カ国の文化を比較する考古学的な要素とともに、その国独特の生活風景や習慣について著者の主観がたっぷり入った旅行記のような記述は、考古学を学ぶ者だけではなくこれから考古学を勉強しようという人や一般の方たちにとって手にしやすいものでしょう。そんな本書の章立ては以下のようになっています。

## 序文

## 序章 土器研究への招待

食卓の主演・陶磁器 / 土器の成立 / 注目される民族誌

## 第1章 エジプト(西アジア)の土器づくり

きっかけはピラミッド / 土器づくり民族誌を調査する

## 第2章 オアシスの土器づくり

憧れのオアシスを訪ねて / 遥かなるオアシス / オアシスの土器作り / 健全なる宴?—「陸の孤島」シーワ・オアシスへ / 素朴な土器生産 / 野焼きで土器を焼く

## 第3章 ナイル・デルタの土器づくり

さらなる工房を探して—デルタ調査 / 過去と現在をつなぐ土器づくり / 天井のある窯で焼く黒い土器 / 密集する土器工房 / 墓地の脇にある土器工房 / 活気に溢れる工房—デルタ西部・グレース / デルタ中央の土器工房—サマンヌード

## 第4章 上エジプトの土器作り

通勤する陶工たち—現代カイロの窯業事情 / 街道沿いの

土器工房 / ナイル川をのぞむ工房 / 単身赴任する陶工 / 軒下の土器づくり / 街中の土器工房—ルクソールへ / 家族でつくる土器 / 陶工の食卓 / 土器づくりのプロたち—厳格な分業体制

## 第5章 エジプト民族誌から何がわかるか?

さまざまな土器生産の姿 / 窯にみる地域性と移動する陶工たち

## 第6章 台湾(東アジア)の土器づくり

東アジアへ目をむける—比較民族誌という企み / 台湾調査をはじめ / 離島を訪ねて—蘭嶼のヤミ族 / ヤミ族の土器づくり / 素朴な土器づくり / 蘭嶼調査雑感

## 第7章 台湾原住民・アミ族の土器づくり

台湾本島の土器づくり / アミ族の粉殻覆い焼き / 覆い焼きの意義と土器生産の姿

## 第8章 台湾原住民の土器づくりからみえてくること

土器製作者の性別を決定する要因は何か? / 覆い焼きの比較民族誌—長く焼く東アジア、短く焼く西アジア / 東西やきもの文化の比較民族誌

## 第9章 南アジア(バングラデシュ)の土器づくり

東西アジアの境界を探る / バングラデシュの歴史と文化 / バングラデシュに行くために / ダッカに降り立つ / 境界の土器づくりを探る / 東西折衷の窯 / 土器の流通 / 変わりゆく土器づくり / バングラデシュ現代事情

## 第10章 「境界のアジア」—土器づくりがみせる新しいアジア

融合する東西アジアの技術 / 「境界のアジア」 / 東アジア、西アジア、境界のアジア / 越境する技術、変わらない技術あとがき

本書の著者は、1991年に早稲田大学古代エジプト調査室による発掘調査に参加していたため本の構成としてエジプトに関する記述が最も多くなっています。土器の焼き方—野焼きか窯焼きか、天井はあるかないか、製作者の性別、製作の手順と方法—などの要点を項目化し、エジプト、台湾、バングラデシュの3カ国(西アジアから東アジアまで)における土器づくりの地域性を非常に分かりやすく述べています。

現在、私は某美術館で開催されているエジプト関連の展覧会において展示作品の保存環境を整える学芸の仕事をしています。紹介した本書のような専門的知識がなくても楽しめる専門書のように、専門的な知識がなくても楽しめる展覧会とは何かについて考えながら、今後も博物館に関する仕事に携わって行きたいと思っています。

## アルカ通信 No.112

発行日 2013年1月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp